

A 短期大学看護学科 1 年生の SNS 使用状況と リスク認知、ネットトラブル経験に関する調査

SNS USAGE STATUS AND RECOGNITION OF THOSE RISKS, AND INTERNET TROUBLE EXPERIENCE IN A FIRST -YEAR NURSING COLLEGE STUDENTS

二口 尚美¹⁾

Hisami FUTAKUCHI

岡崎草代夏¹⁾

Soyoka OKAZAKI

田林 暁一¹⁾

Koichi TABAYASHI

鈴木 寿則²⁾

Yoshinori SUZUKI

キーワード：SNS、看護学生、ネットトラブル、スマホ依存症

Key words：SNS, Nursing student, Internet trouble, Smartphone addiction

英文要旨

A survey was conducted about social media and Social Networking Services (SNS) usage and online trouble experienced by first-year students in a nursing course at a junior college. Eight out of the eighty-four respondents (9.5%) answered that they had experienced with online trouble, and those who answered said that excessive usage of social media and SNS on weekdays had nothing to do with the online excessive trouble experience. The students' usage of social media and SNS is limited to a few SNS usage rather than a wide range of social media and SNS, usage and their purpose of using social media and SNS is mainly to "smooth communication with friends, acquaintances, family, etc." In contrast, they tend to use mobile devices the whole day when they have time, including after meals, during breaking time, between their collage classes, before going to bed and even when they are in their classes. When asked 43 students (51.1%) and 35 students (43.2%) answered "searching for someone to interact with or play together in my spare time" respectively. Seven students answered that they assume themselves "dependent" or "slightly dependent". These tended to increase as student's cumulative weekday usage time increased

1) 仙台青葉学院短期大学 看護学科
受理日：2020年1月31日

2) 仙台白百合女子大学健康栄養学科

要 旨

ソーシャルメディア、ソーシャルネットワークサービス（以下、SNS）の使用状況とネットトラブル経験について短期大学看護学科の1年生を対象に調査を実施した。ネットトラブル体験があると答えた学生は、分析対象者84名中8名（9.5%）であり、これらトラブル体験があると答えた学生たちのソーシャルメディア、SNSの平日の累積使用時間の過多は、トラブル経験の過多と関係はなかった。スマートフォン普及に伴い、常に身近にある端末に、朝食後、や休憩時間、講義終了後、就寝前等一日の生活に渡り触れており、「暇な時になんとなくやり取りをする相手を探し」たり、「遊び相手を探したことがある」と答えた学生もそれぞれ43人（51.1%）、35人（43.2%）であり「時には講義時間中にも使用する」と答えた学生も7人おり、「依存的な状況にある」「やや依存的な状況にある」と答えた学生数は、平日の累積使用時間に関係無く、増加傾向にあった。

I. はじめに

2009年に「青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律」が施行された。2010年の文部科学省調査で、ソーシャルメディアを通じたいじめや誹謗中傷等のトラブルは被害体験よりも加害体験（84.0%）が多数を占めているとの報告がある。2013年、インターネット上のリスクについて「学習意欲」や「学習経験」のある青少年、トラブルに遭遇した経験のある青少年ほど「インターネットリテラシーが高い」と述べられている^{1) 2)}。2014年、内閣府調査では、インターネット上のトラブルや問題行動に関する行為について「あてはまるものがある」と回答した者はスマートフォン所持者の55.5%に上るようになり、2015年の総務省調査ではPCに近い機能を持つスマートフォンの普及によるLINEの使用率が20代では90.5%、10代でも77.9%、Twitterでは20代で53.8%、10代でも49.3%と半数近くを占めることから、スマートフォンの普及とともにまさにSNS時代に突入したと言える状況にある。情報が瞬時に簡便に伝わるSNSの普及に伴い、浮上する問題には個人情報流出被害や「炎上」と言われる批判的なコメントが殺到して収拾がつかなくなる状況、インターネットに長時間没頭することによって仕事や学業、家庭生活等自らの義務を果たすことができなくなり、社会生活機能を低下させてしまうインターネット依存と言われる

病的な状態であり、この有病率は約2～8%と言われる。ソーシャルメディアに加えてこれらSNSの急速な普及は、利用状況の世代間による格差が年代を追って激しく、現状が把握されているとは言い難い。さらにスマートフォンの普及やSNSの利用者数は年齢を追うごとの急速な普及が予測される。近年では、SNSを通じて知り合った関係性や相談相手を求めて利用した結果発生した生命を脅かされる事件もあり、とりわけ女子学生が多い短期大学においては適切な教育により有効に活用するとともに正確に把握することで、短期大学における実情に則した教育を可能にすることができると考える。

本研究の意義は、短期大学生のSNS・ソーシャルメディアの利用の状況とネットトラブル体験に関する現状を把握することで友人間・アルバイト先等でのトラブルを防ぎ危険を回避できるとともに卒後も専門家として適切なソーシャルメディアやSNSの利用に関する教育方法を提示することにあると思われる。

II. 研究目的

本研究はA短期大学看護学科学生のSNS・ソーシャルメディア使用の現状とトラブル体験を明らかにすることである。

III. 研究意義

IV. 研究方法

1. 調査実施時期 2018年9月

2. 調査項目

無記名マークシートを利用した自記入式質問紙調査で23項目を調査した。調査項目は「学年」「性別」「利用端末の種類」「使用経験のあるソーシャルメディアやSNS」「これまで使ったことがあるソーシャルメディア・SNS」「過去3か月以内に使用したことがあるか使用中のソーシャルメディア・SNSの数」「現在使用中のソーシャルメディア・SNSの具体的な名称」「日常生活を送る上でのソーシャルメディア・SNSの使用目的」「ソーシャルメディア・SNSの学業上の利用」「趣味としてのソーシャルメディア・SNSの使用目的」「ソーシャルメディア・SNSへの自覚的依存性」「暇な時間に一緒に遊べる仲間を探したことがあるか」「暇な時間にやりとりできる相手を探したことがあるか」「ソーシャルメディア・SNSの使用のタイミング」「ソーシャルメディア・SNSの平日の累積使用時間」「SNS・ソーシャルメディアの長所は何か」「SNS・ソーシャルメディアの利用上留意していることは何か」「SNS・ソーシャルメディアの問題点は何か」「ネットトラブル経験の有無」「入学以降に体験したネットトラブル」「人に言いにくい悩み事をSNS・ソーシャルメディアを通じて打ち明けたことがあるか」「周囲の人に言いにくいと思える悩み事を、ソーシャルメディアやSNSを通じて受信したことがあるか」「(短期大学の科目の1単元を受講時に紹介された)情報モラルアプリを使用したことがあるか」である。

V. 倫理的配慮

説明書を用いて以下について説明を行った。回答のための所要時間は10分程度であること、提出や記載の有無による不利益がないこと・回答用紙に学籍番号氏名の記名は不要であること、回収は配布後7日間、配布した封筒に入れ、施錠されているレポートボックスを使用して回収を行うこと

で匿名性を高めること、回答によるメリットはソーシャルメディアやSNSによるトラブル防止のための指導方法への反映される予定であることについて説明を実施した。

VI. 結果

配布は92名、回収は87名で、属性データの欠損や白紙、または途中から無記載となったものを除いた84名(有効回答率91.3%)を集計した。

使用端末は、スマートフォンが85名、個人用パソコンが44名、タブレット端末では15名と、学生の利用の軸はパソコンよりも圧倒的にスマートフォンである。携帯電話の利用者は2名で、短期大学設備としてのパソコンを14名が使用していた。

ソーシャルメディアやSNSについて、これまでの使用経験を記載別に分類すると、ブログ20名、メッセージングアプリと呼ばれるLINE、Facebook、Twitter 86名、Facebook、Twitter、Google+等をSNSとして使用82名、次いで料理レシピのクックパッドや、Wikipedia等の共有サイト50名、様々な商品や店を紹介する口コミサイト、掲示板等22名、amebaやココログ等のブログと呼ばれる特定の発信者がテーマをもって発信するサイト20名であった(表1)。この結果より学生たちの利用は、すでにソーシャルメディアから後発のSNSしている。

「現在使用中のSNS、メッセージングアプリ中、代表的なLINE、Twitter、Instagram、Skype、Facebookの5種類について」は、LINE 87名、Twitter 71名、Instagram 70名、Skype 5名、Facebook 6名とLINE、Twitter、Instagramが圧倒的に利用者数が多かった。「3か月以内に使用したことがあるソーシャルメディア、SNSの種類」を聞いたところ、1種類が6名、2種類が22名、3種類、4種類以上と答えた学生が18名であった(図1)。

ソーシャルメディアとはどのようなものであるかとの質問では、「説明不能」が12名、「できない」と答えた学生が29名、「なんとかできる」が21名、「少しできる」が21名、「自信をもってできる」が

表1 ソーシャルメディア、SNS についての説明と累積使用時間 (人)

使用時間	回答数 (人)	SNS とは、どのようなものか説明		回答数計 (人)
		できる	できない	
2 時間未満	27	17	10	27
		63.0%	37.0%	
2 時間以上	57	27	30	57
		47.4%	52.6%	

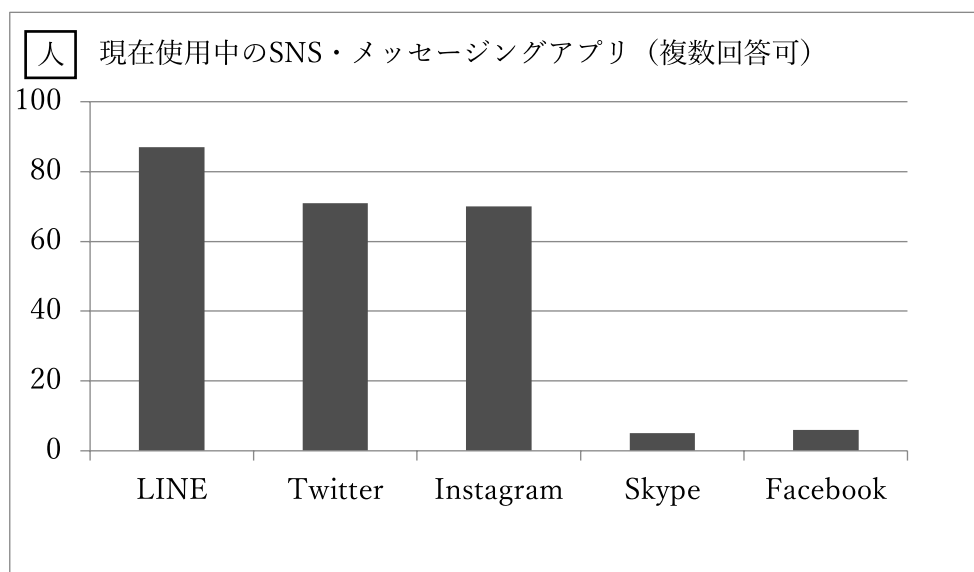


図1 現在使用中の SNS、メッセージングアプリ (人数)

4 名であった。

日常生活を送る上でのソーシャルメディアや SNS の使用目的は、既知の友人知人とコミュニケーションを図るが76名、新しい知り合いに出会うが10名であった。

学業上の情報を得ると答えた学生は56名、発信すると答えた学生は11名、学業上の情報を広く不特定多数の人たちに発信すると答えた学生はいなかった。

ソーシャルメディアや SNS の使用のタイミングは、学内で休憩時間や講義後が71名、自宅で朝・夕食後が52名で、夜間就寝前が72名、夜間覚醒時が26名、時には講義中にも使用する学生も7名であった。

使用しているソーシャルメディアのメリットに

関しては、学生同士の対話やネットワークづくりが59名、他者との交流が増加することで、自分に合った情報を得たり、サポートを得たりできるが44名であった。

今回の調査では個人が特定されることを避ける目的で、年齢や社会人経験の有無を聞いていない。LINE や Instagram、Twitter が主要な中においても「ソーシャルメディア、SNS の利用上留意すべき点」として提示した選択肢5個項目は1)「写真の扱い、個人情報の取り扱い」、2)「看護学生としての議論に参加する場合、自部の意見を(看護学生一般の見解として広く受け入れられないようにするために)アカウント名を明示する必要がある」3)「発信内容において、個人としての発信と専門的な内容の発信では区別するべきで

表2 平日の累積使用時間と 暇な時間に遊び相手、やり取りする相手を探した経験（人）

使用時間	回答数	相手探し経験総数	遊び相手を探したことがある	やり取り相手を探したことがある
2 時間未満	27	22	11	11
		100.0%	50.0%	50.0%
2 時間以上	57	56	24	32
		100.0%	42.9%	57.1%

表3 平日の累積使用時間とトラブル経験（人）

使用時間	トラブルに遭っている
2 時間未満	5
2 時間以上	3

表4 トラブル経験内容（人）

	中傷された	ウイルス感染	架空請求	オークション被害	パスワード乗っ取り
人数	9	8	8	0	0

あること」、4)「クラスメイトが投稿した内容が倫理性に反する場合には適切に注意してあげることが望ましい」、5)「投稿内容によっては社会的信頼を傷つける可能性があること」である。

結果は、1)が64名、5)が34名、2)は4名、3)が8名、4)が2名が留意していることとして回答している。これらは、すべてソーシャルメディアや SNS を利用するにあたり留意すべき点である。

Ⅶ. 考 察

利用したことがあるソーシャルメディアや SNS は、ブログ、口コミサイト、メッセージングアプリ、情報共有サイトと多岐に渡っているが、現在使用中の SNS、メッセージングアプリは LINE、Twitter、Instagram が60人を超えている一方で Skype や Facebook は低く（図1）、同じような使い勝手の SNS が増える中で、身近な友人知人家族とのコミュニケーションツールとし

て使用する上で「便利でみんなで使える」ものに集まっていると言える。

これは、学生たちが当初から目的としている、「身近な人達とのコミュニケーションを円滑にする」一方で、マナーを弁えない場合や行き違いなどによって瞬時にトラブルに発展するリスクも孕んでいることを示唆する。学生たちがこれらを使用する上留意していることは「写真情報に注意することと、個人情報保護」「投稿によっては社会的信頼を傷つける可能性」が多いことから、使用上の基本的な留意事項を理解していないわけではないものの、学習レポートで使用可能なパソコンよりもスマートフォン端末所有率が高く、「食後や休憩時間」、「講義終了後」の空いている時間だけでなく、「夜間覚醒時」や「時には講義時間」帯にも手に取ってしまう学生がいる現実には、多少の依存的な様子もうかがえる。またソーシャルメディアや SNS について、説明できると答えた学生と、説明できないと答えた学生を、平日の累積使用時間 2 時間以上と 2 時間未満で分けた場合、

説明の可否と累積使用時間別人数に差はあまり無く、平日に累積使用時間が2時間を超える学生が57名いることは(表1)、利用方法や管理方法の指導に先行して急速に普及し、学生の生活の中に常にスマートフォン端末がある状況がとりわけSNSの利用を促進している状況を示していると言える。

対象者84名中トラブル経験があると答えた学生が8名であり、累積使用時間の長さとは差が無かった(表2)。

累積使用時間に関しては、長時間使用するほど、なんとなく無目的に使用している様子がうかがえる(表3)。

ソーシャルメディアやSNSの累積使用時間と自己の依存性についての認識の比較で2時間以上使用している学生のうち依存的であると認識する学生が36.8%、依存的だと思わない学生が63.2%であり、平日の累積利用時間が2時間に満たないと答えていても「依存的だと思う」と回答している学生もあり、利用状況を的確に認識して使用するよう指導する必要があると示唆される。

インターネット依存症はギャンブル依存の有病率に比べても対人不安や抑うつ孤独感等と関連性が高い³⁾とされる。ギャンブルのように特定の場に出向いて必要な資金が無いとできないものではなく、食後や講義時間後、就寝前、ときには夜間覚醒時にも手に届くスマートフォン端末は、一人の時間に非常に簡便に手にとって使えることから、依存症への入り口は入りやすい^{4) 5) 7)}と言える。依存症の背景には、抑うつ傾向や不安障害、家庭環境、経済的不安定さ等の背景があり⁴⁾、慣れない一人暮らしや生活生活が変化する学生もいることを考慮すれば、先行研究にある通り、これら重症に至るリスクも視野に入れた予防的な指導も必要となってくるだろう。入学した安堵感や、過密なカリキュラムの中で求められる学習スピードは高等学校の比ではなく、そのような生活の変化の中で簡便にコミュニケーションができ、上手に使用することで詳細な情報を得られる便利さは、有効に活用することで学習効果が上がったり、トラ

ブルを落ちベーションを維持できるメリットもある。一方で、なんとなく利用することにより瞬時に見知らぬ人と安易な接点を持ち、安易な情報発信が意図しない形で広まる等のリスクも存在する^{4) 8) 9)}。これらメリットを生かしつつ自己管理して安全な学生生活を過ごしてもらうためには、情報リテラシーの段階的習得として、学習の進捗により拡大する専門性に合わせた具体的なガイドラインを示し、SNSやソーシャルメディアの使用上のメリットとデメリットを確認し上手な管理ができるよう示す必要がある。

VIII. 結 論

ソーシャルメディア、SNSの使用状況とネットトラブル経験について短期大学看護学科の1年生を対象に調査を実施した。アンケートの分析により、学生達の利用はソーシャルメディアからSNSへ移行しており特定のSNSの利用頻度が高くなっていること、SNSの利用目的は既知の友人知人家族等とのコミュニケーションである。使用のタイミングは多岐に渡り、ネットトラブル体験のあると答えた学生がおり、依存性に関する学生の認識と累積使用時間とは相関が無いことが示唆された。

文 献

- 1) 総務省ホームページ 平成26年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書
https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01icp01_02000028.html
- 2) 総務省「社会課題解決のための新たなICTサービス・技術への人々の意識に関する調査研究」報告書 平成27年3月
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h27_06_houkoku.pdf
- 3) Steve Sussman, Nadra Lisha, and Mark Griffiths Prevalence of the Addictions: A Problem of the Majority or the Minority? Eval Health Prof. : 2011;34(1) : 3-56

- 4) 岡安孝：インターネット依存の心理社会的影響およびリスク要因に関する研究の動向 明治大学心理社会学研究 2015；11：23-45
- 5) 片山友子 水野（松本）由子：大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性総合健診：2016；43（6）657-664
- 6) 荻野正美「若者における SNS 利用行動およびリスク認知の検討」プール学院大学研究紀要：2014；55：57-72
- 7) 岡安孝弘, 永岡紗和子, 鶴田利郎, 三原聡子, 竹中 晃二インターネットをめぐる問題と心の健康—ネット依存の予防と治療— 日本健康心理学会 第30回記念大会プログラム：2017；4-5
- 8) 山口真一：実証分析による炎上の実態と炎上加担者属性の検証. 情報通信学会誌：2015；33（2）：53-65
- 9) 荻野正美：「計量テキスト分析による若者の SNS 利用行動およびリスク認知の検討」プール学院大学研究紀要：2015；56：83～96